



小倉双葉園保育所のもちつき (平成元年12月1日)

21世紀へ創造と飛躍を

市議会議長 加藤 吉辰



市民の皆さん、明けましておめでとうございます。平成二年の輝かしい新春を迎え、市議会を代表し、謹んで新年のごあいさつを申し上げます。

本市が着実に発展しておりますのも、市民の皆さんの暖かいご理解とご協力のたまものであると、深く感謝申し上げます。

また、ふるさと宇治市創生のためのアイデア募集が行われ、「紫式部文学賞」の創設が決定されましたが、多くの皆さんからの貴重な作品が提案されており、今後の施策に生かされることを期待しております。

平成二年は急速な高齢化、国際化、情報化が予測され、それに伴う課題が山積しておりますが、市民の皆さんの期待にこたえるよう新たな決意で臨みますので、一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新年のごあいさつ

市長 池本 正夫



市民の皆さん、明けましておめでとうございます。早いもので、私が市長に就任して十年目を迎えることになりました。この間、市議会をはじめ市民の皆さんのご理解とご協力により、十七万七千市民のふるさととして、清潔にして活力あるまちづくりを進めることができました。心から感謝をいたしております。

本年は、引き続きの公共下水道や道路建設などの都市基盤整備の一層の推進、宇治橋架け替えの促進、フラワーセンターや新庁舎の建設も本格化に向けて全力で取り組む所存です。

一方、国際交流をはじめ紫式部文学賞の創設などの文化を創造するための施策、高齢化社会に備える老人福祉施策、そして障害者福祉施策の推進なども積極的に展開してまいりたいと存じます。

引き続き厳しい行政環境ではありますが、行政の近代化、効率化をはかりながら、本市の恵まれた自然と文化・歴史を生かした夢とロマンのあるまちづくりを進めていきたいと考えておりますので、今後とも、市民の皆さんのご理解、ご協力をお願い申し上げます。

宇治の地・源氏物語

紫式部が『源氏物語』の最後の舞台として選んだ地が宇治であるということを、皆さんはご存じでしょうか。

市では、二十一世紀に向けて「夢とロマン」のあるまちづくりを進めるなか、昨年、ふるさと創生事業として「紫式部文学賞」の創設に向けて取り組むことを決定。この賞は、すぐれた女流作家の作品に贈られるもので、平成における「紫式部」の出現を願うとともに、文化高く、誇りの持てるふるさと・宇治を、との思いが込められています。

私たちが何気なく日々の生活を営んでいるこの地は、古来より、たびたび歴史の舞台に登場しています。この機会にもう一度、ふるさと・宇治を見つめ直してみませんか。

宇治十帖はエピソード

一川のほとりにさりげなく

平安京の貴族たちは、四季の風光に恵まれた名所・宇治を別荘地にさだめ、雅びで華やかな生活をここに営みました。紫式部も、そんな宇治の風土が長編小説のエンディングにふさわしいと思ったのでしょうか。平安文学の傑作『源氏物語』は、「橋姫」にはじまり「夢の浮橋」に終わる宇治十帖でその幕を閉じます。

宇治十帖の章名を刻んだ「古跡」が配置されました。古跡は、宇治橋西詰の橋姫神社をスタートに、橋を渡り、「東屋」・「蜻蛉」などは親しみ深い石仏の愛称ともなり、最終章の「夢の浮橋」は再び西詰に戻ってくるように設定されました。かつて極楽浄土になぞらえた宇治の風土にちなんで、宇治十帖の古跡も「永遠」と「再生」をさりげなく演出したのでしょうか。宇治川の流れを右に左に、一味違った文学碑めぐりと宇治の文化財散歩はいかがですか。



源氏物語手鑑 総角 京都国立博物館蔵

一口紹介

紫式部・源氏物語

紫式部

平安時代中期の作家・歌人で生没年は不詳。天延元年（九七三）前後に生まれ、長和三年（一〇一四）から寛仁五年（一〇一五）ごろに没したと推測されています。紫式部は藤原為時の娘として生まれました。為時の家系からは代々すぐれた歌人や学者が出ており、その血を受け継いだ式部も、幼いころから文才にたけていました。兄が『史記』（中国の歴史書）を読んでいたのを聞き覚え、兄の死後、父から「この子が男だったなら」と残念がられたというのは、有名なエピソードです。

『源氏物語』を書き始めたのは、この夫との死別後だといわれています。物語は一部の人々の間で評判となり、それをとく左大臣藤原道長が耳にしたのでした。式部は道長の娘で、一条天皇の中宮（きさき）である彰子の女房として宮仕えすることになります。その間も物語は書き続けられましたが、寛弘五年（一〇一五）には完成したと考えられています。完成後も数年間彰子に仕え、その後実家に戻って、式部は他界しました。

なお、余りにも有名な紫式部という名前は、実は本名ではなく、本名は不明。紫の上という女主人公が登場する『源氏物語』の作者ゆえ、この名が付けられたのでしょう。



源氏物語と宇治十帖

幼くして母をなくし、少女期に姉も失った式部は、二十代半ばごろ、自分より二十歳も年上の藤原宣孝と結婚。一人娘の賢子をもつけたものの、宣孝とも結婚後二年程で死に別れます。

『源氏物語』は、光源氏を主人公とする全編五十四帖の長編小説。

物語の前半では、帝の子に生まれ、美ほうと才能に恵まれた光源氏が、様々な恋愛運命を重ね栄華を手に入れたが、人の世や愛のはかなさに悩む姿が描かれています。

源氏の死はここにも描かれてはいませんが、後半は彼の死後に話が移り、子の薫や没落した貴族の娘たちの悲劇を綴って終わっています。

平等院は、紫式部が仕えていた彰子の父・藤原道長が、宇治の地に、もともと別荘として建てたもの。式部もこの地に幾度か足を踏み入れたことでしょう。



この源氏物語の最後の十帖は、美しくも悲しい宇治を主な舞台としているため、特に「宇治十帖」と呼ばれているのです。

源氏物語

ふるさと再発見

三室戸寺参道の脇

万福寺

三室戸寺

浮舟

蜻蛉

大吉山

宇治上神社

早藏

宇治神社

喜撰橋

宿木

平等院

夢の浮橋

橋姫

県通り

手習

東屋

椎本

川柳

黄葉

黄葉

京阪宇治橋

JR奈良線

宇治橋

宇治橋東詰から北東へ 約500メートル

宇治橋東詰から府道を北へ約500メートル

宇治橋東詰、京阪宇治駅の北隣

宇治橋西詰、観光案内所の南隣

宇治橋西詰から県通りへ入ってすぐ

宇治橋東詰から府道を北へすぐ。彼方神社横

宇治神社西北隅

宇治川左岸、喜撰橋から上流へ約400メートル

源氏の世界をたずねて

～源氏物語を学ぶサークル～

『源氏物語』ゆかりの地・宇治には今も、その世界に憧れ、学び、知ろうとする多くの人がいます。

市内の公民館で『源氏物語』を学んでいるサークルをご紹介します。

源氏物語をよむ会

源氏のつとめ

宇治公民館
昭和四十五年に発足した「源氏物語を学ぶ会」が変遷を重ね、現在の「よむ会」に至っています。会員は市内外の主婦、二十二人。
月二回集まって「源氏物語」の解釈をするのが主な活動ですが、依頼があれば宇治十帖の古跡を案内すること、これまで物語にまつわるスライド、冊子、こまねなどを手掛け、昨年はかるたを製作しました。現在新しい講師を探しており、決まればメンバーを増やしたいとのこと。
代表・連絡先は辻益子さん(☎2121)。

古典文学サークル

小倉公民館
『夕霧』の巻からの原文解説。
代表・連絡先は村上元子さん(☎2027)。



▲「源氏物語をよむ会」製作の宇治十帖百首かるた
▶お正月には自分たちの作ったかるたでかるたとりも



宇治で見つけた

うま年ファミリー

山口さん一家
五ヶ庄寺界道
僕たち双子兄弟と
お母さんがうま年です

「うちは一言で言うにぎやか家族です」という山口さん。お互いのことを「きらい」と言い合います。

がらも、いつもいっしょに遊んでいる双子の正喜君(二)と写真右端・博太郎君(二)を中心に、けんかも笑いも絶えない明るいご家族です。

「時間があれば、家族みんなで犬のボチを連れて、ジョギングをしています」とお父さんの博司さん(三)。休みの日には、一時間半ほどかけてジョギングをすることもあるそうです。

「それからテレホンカードもみんな集めているんですよ」と見せていただいたコレクションはアルバム六冊分。圧巻でした。

「宇治に住みやすいまち、これからずっと住みたいですね」とお母さんの富喜子さん(三)の意見にはみんな賛成ですが「隠元橋の朝夕の渋滞はどうにかならないでしょうか」という注文も。

なんでもみんないっしょにやる仲よし家族・山口さんに、今年もよいことがありますように！

田村さん一家 伊勢田町南遊田

私たちはうま年三世代の七人家族です



おじいさんの一彦さん(五)、お母さんの圭子さん(三)、長男の政俊君(二)がうま年生まれという、

うま年三世代家族・田村さん。「いつも近所の子が遊びに来るにぎやかなうちです」とおばあさんのスガエさん(五)。

お父さんの俊秀さん(三)、おじいさん、お母さんがお仕事をされていて忙しい毎日ですが「休日にはよく、お弁当とボールを持ってみんなで太陽が丘へサイクリングします」と、大切にされているのは家族のふれあい。少年野球に熱中している政俊君、手芸や絵が得意な香織ちゃん(八)、プラモデル作りが大好きで元気な章浩ちゃん(八)、それぞれ個性が光る、はつらつとしたご家庭です。十二年間住んできた宇治市には「駅や市役所へ行く交通の便が悪いのが難点、でも自然がいっぱいで遊ぶところが多いのが素晴らしい」という感想を持っていらつしやいます。

「今年の抱負はみんな健康で過ごすこと」という田村さん、今年一年もイキイキ元氣なご家族で！

うま年にゆーす

日本で初めて

馬に乗った人たち

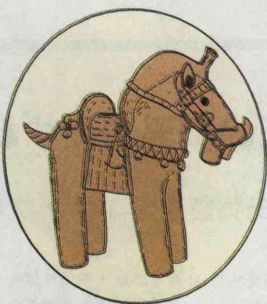


『上代の武装戦士』山田宗光書(『日本上代の甲冑』末永雅雄より)

今、私たちが馬を見るのは、時代劇や競馬中継などのテレビを通じてがせいぜいです。しかし、馬には田畑を耕したり、人や荷物を背中に乗せたりと、長い間、人と深くかわつてきた歴史があります。そこで、今年の干支(えご)にちなんで、日本ではじめて馬に乗った人たちのお話をしましょう。

馬が数多く飼育され、泥と汗にまみれて人と動くようになるのは、もともとつと後のことなのです。

日本に大陸から乗馬の習慣が伝わったのは、約千六百年前、古墳時代中ごろのこと。その時期になってはじめて、豪族のお墓であ



飾り立てられた馬形埴輪